

カンボジア 元気日記



国連ボランティア奮闘330日



福永美佐



新潮社



カンボジア 元気日記

国連ボランティア奮闘330日

福永美佐



新潮社

カンボジア元氣日記

— 国連ボランティア奮闘330日 —

福永美佐

© Misa Fukunaga 1994.
Printed in Japan



発行 一九九四年一〇月二〇日

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

162 東京都新宿区矢来町七一

電話

— 営業部 (03) 三二六六—五一—
— 編集部 (03) 三二六六—五四—一

振替 東京四—八〇八

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、二面側ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-400801-X C0095

価格はカバーに表示してあります。

目

次

I 二十八歳の決心 9

何なの、この顔！

重大な決意は突然に

後は野となれ、山となれ？

母の生き方、わたしの生き方

II カンボジアの土を踏んで 23

こんにちは、プノンペン

それいけトレーニング

とりあえず、さよならパーティー

相棒マイケルとコンポンスプーへ

全てがはじまる一日

地雷と自然に囲まれて

ピンクの蚊帳

仕事開始、戦闘開始

「選挙」って何？

国内避難民キャンプ

偉い人が考えていること

III

たくさんの小さな事件 97

おいしいご飯が食べたいな

UNTACの起こした交通事故

素晴らしきかな日本

かの有名なブルガリア部隊

ハムがどうしたの？

給料未払い事件

有権者登録とベトナム人

松ぼっくりは手りゅう弾だった

走り出したら止まらない

有権者登録、初日

ボト派兵士の選挙

ベトナム人嫌い

世界人権デー

ジャックフルーツ騒動

IV

あっちゃんの死

194

選挙トレーニング

胃の痛い日々は続くのだ

日本のラジオが治安を悪くした

日本人選挙監視員殺害事件

眠れない

去るか、残るか

V

「殺してやる」といわれた日

250

脅迫されて

日本文民警察官殺害

緊張の日々

選挙の日

開票作業とロシア人

VI

さよなら、昔のわたしとカンボジア

280

仕事は終わった

お別れのキス

わたしの学んだこと

あとがき

297

わたしのカンボジア全土略図



カンボジア元氣日記

— 国連ボランティア奮闘330日 —

I 二十八歳の決心

何なの、この顔！

「わたしはこのまま役立たずとして一生を過ごすのかしら」

二十八になる年の正月、わたしはなんとそんなことを考えていた。大学を出てからいろいろなことに挑戦したが、結局活字の仕事を選んで編集者の道を歩み始めていた。それが、そう二年前のこと。会社の人間関係はこれまで味わったことがないくらいスムーズ、なにより仕事に面白かった。いろいろな人に会えて、それを文章にしていくな。けれど、ただひとつ残念だったこと。あまりにも忙しかったのだ。ハワイ観光客向けの旅行雑誌担当のため、年四回のハワイ出張。ハワイ好きでなくとも羨ましがられる立場だ。

私にしてみれば「仕事で行く」こともあって、毎日朝から晩まで取材に動き回り、ヘトヘト。

時には苦手な高所からの取材（ヘリコプター、小型飛行機ツアー）でぐったりということもあった。それでも取材で外に出られるのは、社内で机に向かつて一日過ごすより健康的だ。

ハワイから戻ったら、時差ボケと闘いながら原稿書き。その後、デザイナーにレイアウトを依頼し、出来上がったら入稿。そして校正。校了ぎりぎりまでDTP（デスク・トップ・パブリッシング）操作のため、コンピューターと夜を共にする生活になる。機械の前で死んだように寝てしまうこともあった。

校了を終え、疲れた体を引きずって家で爆睡すること二、三日。それから次号の企画を練り、ハワイへと出陣していく。三カ月が同様に繰り返し繰り返していったのだ。締め切り間際はいつも徹夜の連続だった。

自分の実力の限界を口にするのが一番怖くて、どうしたらこの事態を抜け出せるかを考えてみた。

「忙しいことが嬉しかった時期もあったのに、どうしてかしら」

通勤電車の窓に映ったわたしの眉間に深い皺がよっていた。

「何なの、この顔！」

一生懸命笑顔を作ってみたけれど、眉間の皺の跡は、そう簡単には消えてくれなかった。

実は非常に勝ち気なわたしなのだけれど、一見おっとりして見えるらしく、友人たちにはわたしのイライラは伝わっていなかったようだ。

一度誰かに作業の説明を求められて、忙しさの余り、不機嫌に説明したことがあった。相手は気に留めていなかったみたいだけれど、その時、ものすごく落ち込んでしまった。三年前、タイへ行ったときに気付いたはずだったのに、もう忘れてしまったなんて。あの新鮮な温かい気持ち、もう使い果たしてしまったのかしら。

三年前、アメリカの通信社でアシスタント的な仕事をしていたわたしは、契約をあと二年近く残して退職した。理由は「プロフェッショナルを目指すため」。別に当てがあつたわけではないけれど、ステップアップを図るためにちよつと時間が欲しかったからだ。折しも、友人のアメリカ人がハワイへ帰るので東南アジアを回りたいとのことだった。せっかくだからと便乗したものの、実を言うとなたしは、東南アジアがキライだった。

もちろんタイにも興味はあまりなかったが、タイ料理には目がなかった。タイへ行こうよ、と言われたときも、本場のタイ料理にありつけるという下心がなかったら躊躇したに違いない。

タイ料理の刺激的な辛さは決して素材の味を損なわない。一見中華に似てはいるが、辛味が体を引き締めて、脂っぽさを感じさせない。醬油ベースの味付けに食文化の共通性も感じて、タイ料理は私のお気に入りとなった。唇を赤く腫らし、舌が痺れる感じがなんとも言えない。私は「ヤムヌア（牛肉サラダ）」と聞くと条件反射で唾液が出て来るまでになっていた。

けれどもタイへの旅はわたしにとって、「これまでのわたし」を猛省させる旅になった。自分の無知を恥じ、温かいもてなしに感謝しながら、後ろ髪を引かれる思いで二週間の旅を終えた。もう少し、長く旅していたかった。

そのころのタイは高度成長の上り坂の勢いで、バンコクは混沌とした中にも活気に満ち溢れていた。東京のような高層ビルの建築があちこちで行われていた。経済の発展ぶりにも目を見張ったが、何よりも驚いたのは人々の温かさだ。

チェンマイでは、友人の紹介で会ったタイ人女性が、わたしたちを連れて町中を案内してくれた。初対面なのに「ゲストだから」と食事代、お土産代とすべて支払ってくれた。

「急にたずねて来て、そんなにしてもらってはい」と恐縮してお金を渡そうとしても受け取らない。他にもこんなことがあった。

連れの友達が夜行バス内で盗難に遭った。警察に届けると、

「タイの印象を悪くしたのではないか」

と随分心配してくれ、そのうえお昼までごちそうになった。両替をするために銀行の場所をたずねると、そこまでパトカーで「連行」してくれた。

その誰もが、昔からの友人をもてなすように親しみを込めて接してくれた。わたしも以前から

の知り合いのように無理を言ったりしていたけれど、その場の雰囲気はそれを許してくれているようだった。

わたしの過ごして来た二十五年という歳月は何だったんだろう。わたしが見て来たものは、物の事のほんの一面だったんだ。そう思つて愕然とした。こんなに近い国なのにどうして今まで関心がなかったんだろう。メディアを通しての判断だけで、偉そうに「東南アジアは汚いからイヤ」なんてよくも平気で人前で言えたもんだ。わたしも文化の源を同じにするアジア人であるのに。

この旅行を境にわたしの中で何かが変わった。友人のひとりが、
「タイに行つて表情が変わつたね。何ていうか、以前よりも柔らかいっていうか」
心に染み入る旅だった。

帰国してからとにかく東南アジアに関することには何でも首を突っ込んだ。「東南アジア」とついていれば、時間の許す限り、シンポジウムや勉強会に顔を出した。自分は開発途上なんだから、と自分自身に言い聞かせてゼロから出発した。

そんなある土曜日、上智大学であつたシンポジウム（今となつてはどんな内容だったかも覚えていないけれど）で聞いた、NGO（非政府機関）のひとつである「風の学校」を主宰していた故中田正一さんの言葉が今でも心に残っている。

「ここにいらつしやっているみなさんは、もちろん興味をもつてこの会に臨んでいると思います。でも残念ながら、今の日本で欠けているのは、関心。関心がなくなっちゃつたらおしまいだ」

当時既に八十歳を越えていた中田さんが、背筋をぴんと伸ばして語つておられた姿は印象深い。そしてわたしは「無関心」に気付いた自分を少しうれしく思っていた。いつかきくと中田さんのように自分のできることを必要としてくれる場所で活かしてみたい。そんな思いが湧き出て来たのがこの時だった。

時は過ぎて行くばかり。仕事と自分に対するストレスは溜まる一方。わたしの周辺は結婚、出産ブームを迎えていた。みんな自分の人生の岐路に立っているようだった。さあ、わたしはこれからどう生きていこうか。他人と比較することのない自分らしい人生って？

重大な決意は突然に

一九九二年二月。新聞の片隅に載った記事が目に残った。

「パリ協定を基にカンボジアで行われる選挙を一年にわたって監視、指導するボランティアを募集する」

前年の十月、長かった内戦に終止符が打たれ、パリで協定を結んだことは新聞やテレビで知っていた。

わたしの中でムクムクツと起き上がる何かを感じた。ほんの数行のベタ記事を何度も何度も繰り返し読んだ。

日本の選挙なら、学生のころから数年にわたって手伝った新聞社の選挙報道や世論調査の経験が活かせるかもしれない。数百人の学生を集めて、世論調査の準備をした。投票日に打ちのアルバイトもした。選挙の流れや雰囲気は肌で覚えているはず。チャンスだ。

それじゃあ、カンボジアについてわたしの知っていることは？

シアヌーク殿下、波尔・ポト派、長い内戦、そして映画『キリング・フィールド』。連想ゲームのように浮かんで来たのは、これだけ。すぐに問い合わせの電話を掛けなかったのは、カンボジアについて自分が何も知らないことに気がついたからじゃない。問い合わせ先が、ジュネーブになっていたからだった。やっぱり英語で掛けなきゃだめだよな。そう思ったら胸の中を不安がよぎった。ジュネーブという響きもすごく遠く感じた。決心がつく前にわたしは、長期出張で日

本を離れ、再び仕事のことを考える毎日に戻っていった。

「カンボジアの選挙監視員の面接試験が東京で行われる」という記事を読んだのは、四月だった。心の中がざわめいた。とりあえず、問い合わせをしてみよう。わたしの心は急いた。外務省の国際機関人事センターへ電話をすると、まず登録をして欲しいとのこと。そこで必要書類の送付を依頼。翌日、送られて来たのは、A4の簡単なアンケートだった。学歴、職歴と希望任地を記入する。アンケートの中には希望職種の欄もあり、食べ物に目のない私は、食糧配布という項目に心引かれたが、「特殊技能を必要としないものならなんでも可」と書き込んで送り返した。

国連開発計画（UNDP）から電話があったのが五月に入ってからのことだった。登録してからしばらく電話もなかったので、四月の面接ですべて決まってしまったのか、と諦めていたところだった。「国連ボランティアとして登録する気持ちがありますか」と質問され、「ハイ」と答える。二日後送られて来たのは、英語の履歴書用紙。正直言って、唸ってしまった。が、考えている暇はなかった。とにかく片っ端から埋めて行くしかない。面接で落ちるかもしれないし、第一、履歴書で落とされる？ とにかく、行きたいんだから挑戦するしかない。宝くじだって買わなきゃ当たらない。

数日履歴書と格闘。かくして締め切り前日に速達で郵送したのだった。

面接の案内は、すぐに来た。

「第一関門は突破した」

書類で落とされることが気掛かりだったので、内心ほっとする。面接は五月末の土曜の午後、南青山にあるUNDPの東京連絡事務所で行われることになっていた。

時間ぎりぎりで駆け込むと、ふたりの男性が面接官と談笑している最中だった。